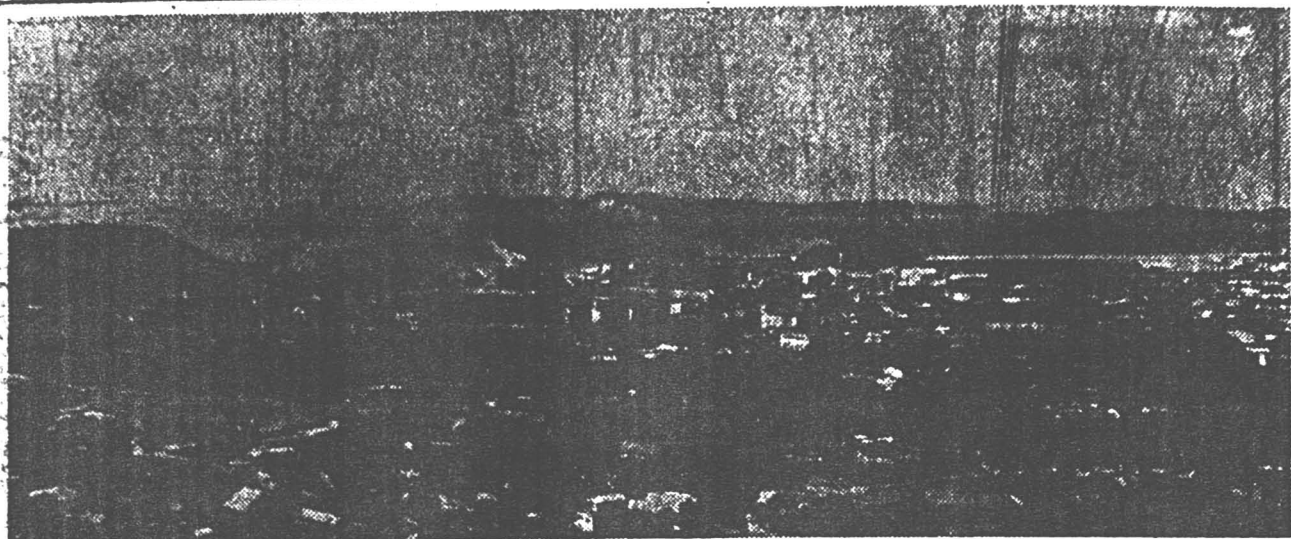




住民意識の力へ

「患者に認定されなかつ、付近の人から『月給取りになんはった』と言われた。よるこたる気のすつとすばい——これはチツソに対し独自の立場から補償交渉の申し入れをした、いわゆる自主交渉派の会合で出た患者家庭のことである。

訴訟派、一任

派にも匹せず、自主交渉に断み切つとする動きに対しては

「また新たな、よけいな波乱を起す」とも言われ「お願いですけん。記事にしなければつたら名前を出さなくてはいいよ。あまたたちには私たちの苦しみ

▲……やはりチツソが中心の町・水俣

隠れ水俣病

はわからん」と肩を大きくふるわせて泣く婦人。かたわらにいた交渉代理人の島森木昭雄弁護士（水俣病訴訟弁護団メンバー）が「それが水俣の宿命みたいなものだ。しかしいつかは断たなければ——」と強調した。人に会わないように、病気の子をだれも運らないような道を、瀬んで病院に運んだ母親。船を降り、煙を捲り払って耐え忍んだ長い十数年。患者家族に夥りを聞えは、発病当時のことが七手も切ったようにあふれ出る。しかし、それもある程度、患者家族と隔しくなったものにだけ

複雑な風土が

「抗争」の連続で原

会社の興

「幻想的共同体」

漁業集落はともかくだが、

力手根のいつさいない家が、海べに重なり合ふやうに並んでいる。オープン化された地域共同体、そこに多くの患者が出た。

患者家族もその共同体の一員として組み込まれている。学校への寄付や地区通達設備寄付も同じだ。患者家庭で、しかも生活保護家庭で、収入に比較して

で、市外からの訪問者には力手のように驚いたフタを開さず。そこに妙に「屈折したものをかき取る人も多かった。

多額の寄付をした例があった。寡った側は「差別の印象を与えてはいけない」との理由をあげた。家庭も「ムラのためなら」

覆いに

点を見失う

亡に連帯意識

と協力していた。

こうした地域共同体の一員であつたとする患者家族の素朴な心情がある一頁、なぜ水俣病をタブー視することになったのか。漁民たちも含めて、地域全体をおおつ何かがあるに違いない。

「工場の煙をいまなお、桃枝の里」の新興の気分として夢みつつけている世代が、あまたいるとしても不思議ではない。経

済学用語ならいえば「労働者階級に寄生する資本」といえても、わが歴史的市民派たちは、これを、同じ土壌に棲(す)みついた共同体の新しい成敗、というふうを迎え入れ続けてきていたのである。村民たちの共同体意識とは、数々の工場誘致運動を試みながらそれが実現を見ず、いまなお新産都市への夢を捨てきれずにいる熊本県の後進意識を、三太郎郎のむこうのこととしてながめ……徳富健水、

でもっているようなもの、もし会社がつぶれるようなことがあつたら市民はどうしますか。市民に迷惑をかける、私たちはそうした観点から補償を解決した」と常々語っている。ここでは加害者と被害者の立場が逆転しかねない。

障害になる分裂組合

たしかに、水俣ではチツソが地域経済を動かす支配力を持っているという現実はある。

「企業依存の弱みから「チツソ脱却」が叫ばれたこともあるが、浮田市長は「既存企業にたよらない企業誘致は非常に困難である」と語っている。

このチツソには、いまなお抗争を続ける二つの分裂労組がある。会社と平和協同組合をしているチツソ水俣労組(新労)と、合化労連新日鐵労組(旧労)。水俣病に対する取り組み方には、大きな違いがある。新労は患者家庭互助会の一任派

(和解派)につき、旧労が訴訟派についているのは周知の事実である。

労組の徹底した組織力と教育活動は全市民に浸透する。各種選挙でも同者の対決がある。市議会でも「議員は傍聴席のわれわれの方を向いて審議している」(労組幹部)という。市民が水俣病に無関心をよておるのは、この組織の争いに巻き込まれたくないからとも指摘されている。

こうした抗争に明け暮れる中では、表面上の日常的な動きに目が奪われ、大きく広がりを持つ水俣病の「原点」に迫る余裕がなかったのもまた事実である。

「幻想的共同体」、そこからくる住民の自己規制、会社の経済支配、分裂労組、そんなものが複雑にかみ合っている水俣。この風土こそ「水俣病を隠していた」のだ。

メモ

◇チツソと市勢

市街地の平たん部 品出得総額百八十四億円のうち百八億円がチツソ。港湾は水の約三分の一の約三万平方メートルを所有。うち七十一万平方メートルを専用港と工業用地(埋め立て地)五十万平方メートル、工業用水十七万平方メートル、自費発電で最大九万(目)を水俣川から取水(上流)。二十九年まで家庭にチツソ水道は伏流水を利用しピークで一日二万トン、工業型